令和６年度　努力点　グランドデザイン

Ⅰ　到達目標（ビジョン）

目指す子ども像：主体的に学ぶ子ども

主体的に学ぶ子どもとは、

自分の課題を見付け、解決していく子ども

のことである。

令和３年、「教育課程部会における審議のまとめ」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）では、今後の教育課程の在り方について、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには新たに学校における基盤的なツールとなるＩＣＴも最大限活用しながら、多様な子どもたちを**誰一人取り残すことなく**育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとされている。また、名古屋市教育委員会が発表した**ナゴヤ学びのコンパス**の目指したい子どもの姿に「ゆるやかな協働性の中で自立して学び続ける」ともある。このことから、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげることが求められていることが分かる。

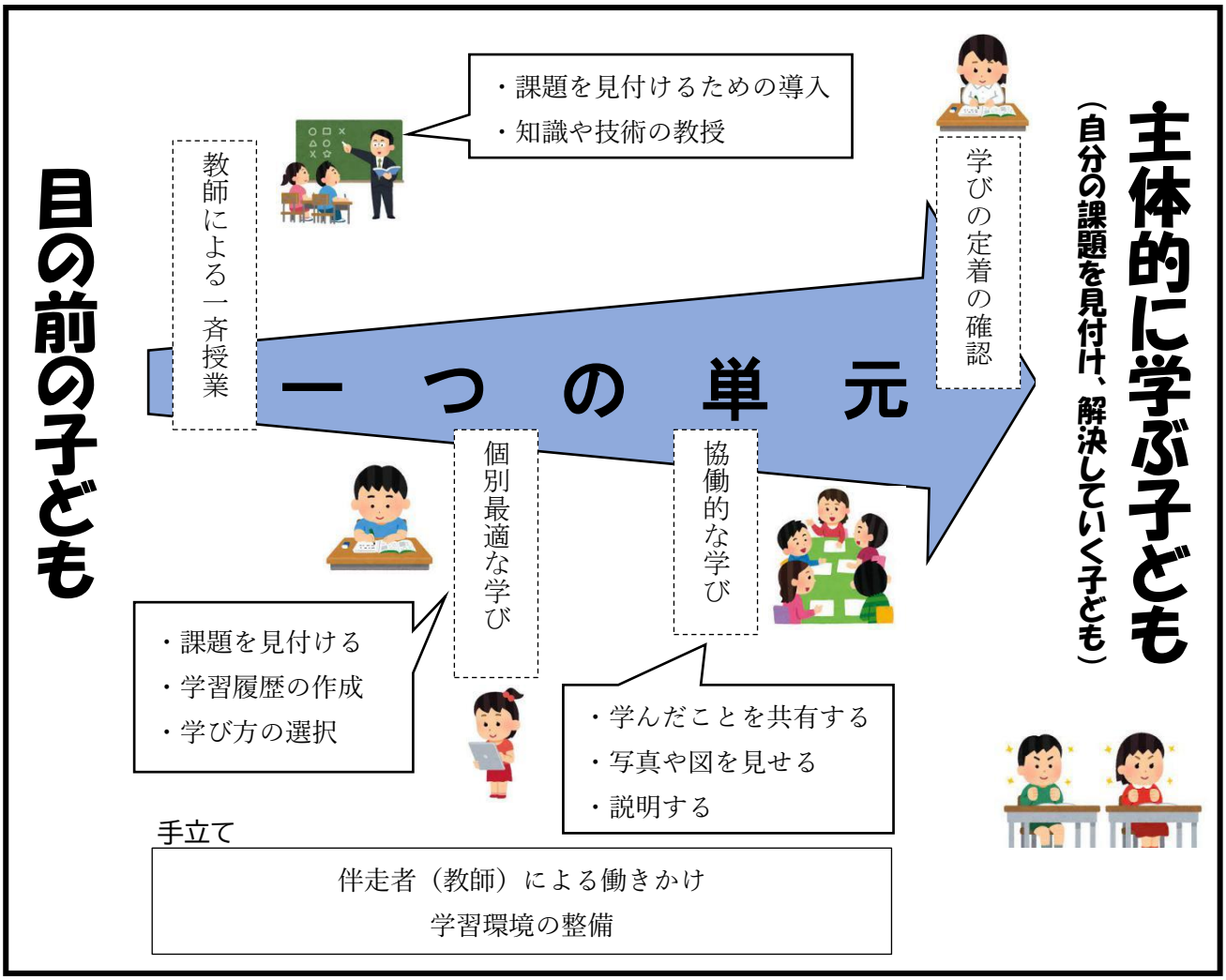
令和３年「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）」（中央教育審議会）では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。それぞれについては、以下のように示されている。

「指導の個別化」：	支援が必要な子どもにより重点的な指導を行ったり、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行ったりすることで、全ての子どもに基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させることができるようにすること。
「学習の個性化」：	一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身の学習が最適となるよう調整することができるようにすること。

昨年度は、単元の中の数時間の授業計画を立て、学習履歴を作り、児童に主体的に取り組ませる研究をした。学習履歴を活用することで、学習をどのように進めていくか学習の見通しをもったり、自分が何を学んだのか振り返ったりして、自らが考えて取り組むことができるようになった。一方、児童の学習進度の把握の難しさや個人差への対応、教師が意図する学習内容に向かわせていくための手立ての必要性など、教師の立場が課題として見えてきた。

そこで、単元の終末時に児童にこういうことを学んでほしいという具体的な「ゴール」を意識した単元計画を作成する。

学習履歴の活用や学習環境を整備、児童の内容の定着や教師の働きかけなどを工夫し、子どもが自分に合ったペースや方法で、その単元で学ぶべきことを学んでいくことができるようにする。そして、単元の終末には、学習内容が定着しているのか、テストなどで評価をとって検証していく。また、昨年同様、個別最適な学びが孤立した学びにならないように、学びの成果を共有することや、協働学習により、協働的な学びについても触れていく。



2　目指す子どもに必要な力

・自分のめあてを見付ける力（単元の目標とは別に毎時、自分のめあてを設定していく）
・計画を立てる力（単元の終末時にどうなっているのか想像する）
・振り返りをする力（自分のめあてに対して振り返りを行い、次につなげる）

これらの力を学年の実態に合わせて、身に付けていきたい。

3　テーマ

主体的に学ぶ姿を引き出す授業づくり

～自分に合ったペースや方法で学ぶ、子ども中心の学びを目指して～

4　研究計画

教師が立てた単元計画を基に、自分がいつ、何を、どんな方法で学ぶかを児童が計画していく。単元計画の中に単元の目標を設定し、それに沿って学習履歴を作って見通しを立てたり、毎時のめあてを設定したり、振り返ったりすることで、主体的に学ぶ姿を引き出す。単元の目標からそれていかないようにする手立てや個別最適な学びや協働的な学びを適切に行うための教師の働き掛け、学習環境の整備などを手立てとして取り組んでいく。

３年間の流れ

令和４年度（一昨年度）

個別最適な学びがどのようなものかを追究。意図的に子どもに自己決定させる場面を設定。

令和５年度（昨年度）

子どもが自ら学び、学習履歴を活用しためあての設定や振り返りを行うことで、学習の見通しを立て、主体的に学ぶ姿を引き出す。個別最適な学びの種類を増やす。

令和６年度（今年度）

単元全体を通した単元計画を立て、子どもが自己決定をしながら学び、教科学習として教師が意図する学習内容である知識・技能が定着しているかを検証する。（テスト、できた人数など。）

５　今年度の取り組み

（１）　手立てについて

単元の終末時の児童がこういうことを学んでほしいというゴールを意識した単元計画を立てる。児童が学習履歴を作り、単元の目標に向かってどのように学んでいくのかを考えていくことができるようにする。学習履歴を使った毎時間のめあて・振り返りや単元の目標に向かってそれていかないような工夫、個別最適な学びや協働的な学びを適切に行うための教師の働き掛けや学習環境の整備などを手立てとして計画する。

（２）　評価について

単元の終末時、子どもの学びが確かなものになっているかテストなどで評価する。など

（３）努力点の進め方について

① 現職教育、公開授業の指導案共有

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指した授業改善について学んでいく。

② 授業実践について

様々な教科、単元で行う。学年で１単元を選択して、単元計画をたてる。公開授業は学年で公開する授業を決め、１実践を行う。

③ 事前・事後検討会について

各部会で時間を設けて行うようにする。特に事前検討会では単元計画を中心に検討し、その中でどの時間を公開するかを決めるようにする。

④ 代表授業について

２学期に１回行う。指導案の検討から学校全体で単元計画を検討し、進めていく。

⑤ 学習指導案について

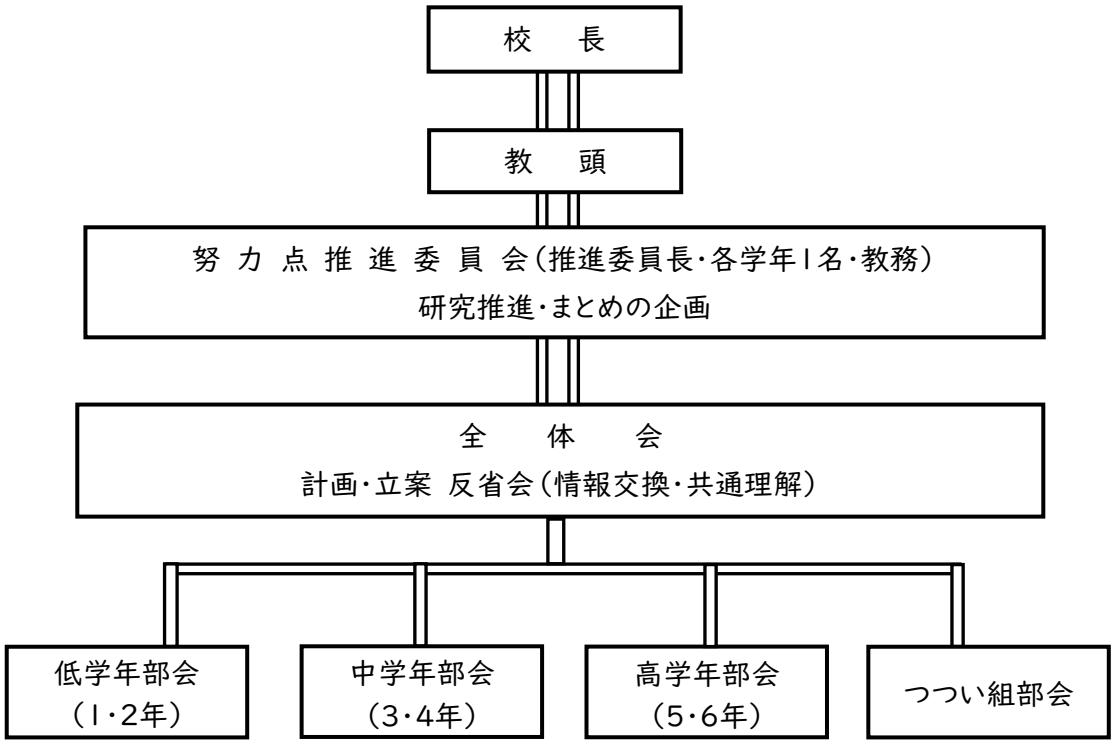
授業公開の１週間前までに、教務と推進委員長に時限と活動内容を知らせ、前日までに単元計画と略案を全職員に配付する。

⑥ 最終報告について

令和７年１月２７日（月）最終報告会

今年度の実践の様子を学年で報告する。

6　研究組織



年間の研究計画

月	部　会	内　　容　　※(　　)内は予定
4	・推進委員会 ・全体会	・研究推進計画検討（4/12） ・研究のねらいと実施計画についての共通理解・全体授業代表者の決定（5／2）
5 6 7 9 10 11 12		・実践の実施 ・全体授業の事前検討会（10月中旬） ・全体授業（10月下旬）　事後検討会（10月下旬） ・実践のまとめ方の提案、まとめ作成
1 2 3	・全体会 ・推進委員会	・最終報告会（1/27） ・来年度の計画（2/17）

※　上記以外にも、必要に応じて推進委員会や学年部会を開く。